

(大島郡龍郷町大字赤尾木字牧)

位置と環境

遺跡は幅800mの赤尾木地峡に隣接した標高20m程の海岸段丘の末端部に形成された砂丘上に立地している。砂丘をじょうご山系に源を発する手広川が太平洋に流れており、遺跡の北側に低湿地を形成している。

調査の経緯

昭和51年奄美考古学会員・里山勇廣により発見され、昭和53年には遺跡の性格を確認するために町教育委員会・奄美考古学会による発掘調査が行われた。その結果奄美においては希少な重層遺跡であることが判明した。

採砂により砂丘のバランスが崩れ、遺跡保存の困難が予想されたので、熊本大学考古学研究室を中心とする調査団が調査主体となって、昭和59年に本調査(約250m²)が実施された。

遺構と遺物

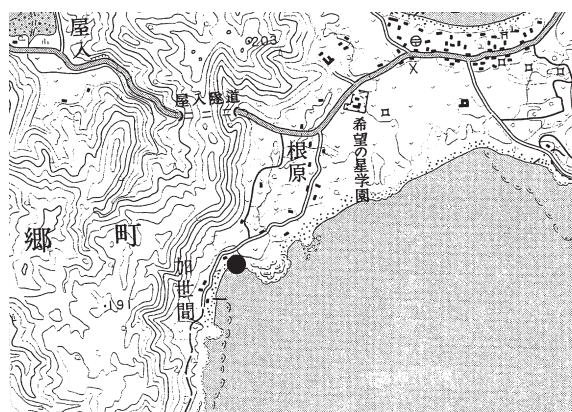
昭和53年の調査では、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期相当期、兼久式土器文化期の遺構・遺物が発見された。初めて兼久式土器文化期で鉄の存在が確認されている。

昭和59年の調査では、前回の調査では確認されなかった縄文時代後期の嘉徳Ⅰ・Ⅱ式を出土する遺物包含層や、集石遺構と住居跡と思われる石組遺構が発見された。

縄文時代後期の遺構としては、集石1基、石組遺構1基や同一種の巻貝の集中するピット・種別にまとまった貝溜り等が発見された。

集石遺構は、皿状の焼土の上に焼礫がのった状態で検出されており、遺構内には少量の土器片と貝が伴うのでアースオープンとして使用されたと想像される。

縄文時代晩期の遺構としては、集石1基、石組遺構3基が発見されている。集石遺構は、顕著な掘り込みは確認されず、灰・炭化物が混じる黒褐色土が広がり礫の間から土器片、貝、骨片等が少量発見された。



第1図 手広遺跡の位置

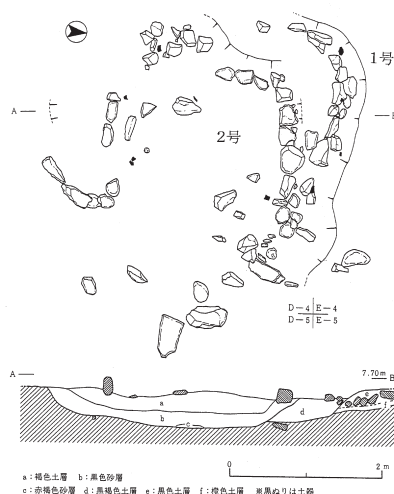
石組遺構1号と2号は複合して検出され、両者の切り合い関係から1号遺構の先行が確認されている(第2図)。いずれも掘り込みを作り、掘り込みの立ち上がりの部位に石を組んで、平面の形は1辺が約2m程の隅丸方形ではなかったかと推測される。

また2号遺構では掘り込み最下面に焼土の広がりが発見されている。両者とも柱穴らしきものを確認していないが、住居跡ではないかと思われる。

3号遺構は、西から東へと傾斜している傾斜面の上で検出された。石組の範囲内からは遺物がほとんど検出されなかったため、住居に関する何らかの外部施設ではなかったかと思われる。

縄文時代後期の土器としては、嘉徳Ⅰ式土器(第3図1) 嘉徳Ⅱ式土器(第3図2)、面縄西洞式土器(第3図3・4)等が出土している。

縄文時代晩期の土器としては、喜念Ⅰ式土器(第



第2図 石組遺構1号・2号

3 図 5・6) 等が出土している。

また住居跡と思われる石組遺構が検出された層からは、有孔土製円版(第3 図7)や楕形石製品(第3 図8)に石鏃、磨石、凹石、敲石、クガニ石等が出土している。骨・貝製品としては、貝匙・貝刃や貝輪と骨製針が出土した。有孔土製円版や楕形石製品は奄美で初めて出土した珍しい資料である。

特徴

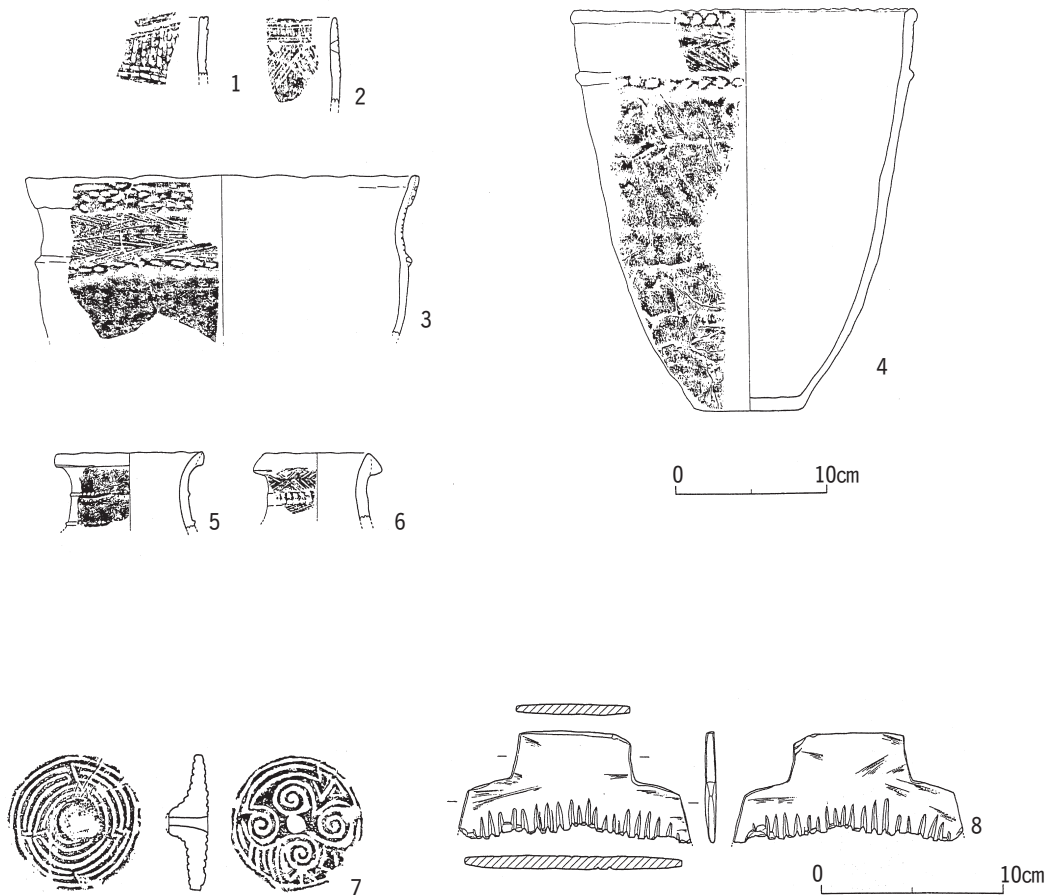
調査の結果、7 文化層が確認され土器については、第1 文化層(兼久式土器)、第2 文化層(刻目突帯文類似土器・丹塗磨研壺形土器)、第3 文化層(リボン状突起をもつ土器・長頸磨研壺形土器)、第4 文化層(カヤウチバンタ式類似土器・外耳土器)、第5 文化層(宇宿上層式土器・喜念 I 式土器・条痕文土器・黒色磨研土器)、第6 文化層(面縄西洞式土器・壺型土器・外耳土器)、第7 文化層(嘉徳 I・II 式土器)と出土しており、奄美における土器文化の変遷を捉えるための重要な資料である。

資料の所在

出土遺物は、熊本大学考古学研究室に保管されている。

参考文献

熊本大学文学部考古学研究室1986「手広遺跡(概報)」『熊本大学文学部考古学研究室活動報告』20 (松村智行)



第3 図 出土遺物